

2026 年 11 月 26 日　森本紀行はこう見る

消費を繰り延べて投資すると欲しいものと働き方が変わる

金融機能とは、働いて所得を得る時点と、消費する時点との間にある時間を埋めるものであって、消費を前倒すのがローン、繰り延べるのが資産形成です。

予定が狂うといいますが、予定は、所詮は、不確実な未来についての仮定にすぎないので、狂って当然です。しかし、狂うという言葉使いの背後には、予定を狂わすのは悪いことであって、人は、予定が狂わないように、最大限の努力をすべきだとの思想があるようですから、予定は、多くの場合、不確実な仮定ではなくて、確実に実現されるべき目標なのです。

予定は、目標だとすれば、踏み外すべきではない一本の線になりますが、不確実な未来についての仮定にすぎないとすれば、幅のある広がりになります。このように、予定を点の連続としての線ではなく、幅のある面だと想定すれば、予定の外へ逸脱することは滅多に生じ得ないのですから、予定は狂わないのです。しかし、他方で、予定を線として想定しない限り、予定は、目標、あるいは行動の目安となるべき基準としては、機能し得ないわけです。

面としての予定とは、例えば、投資のリスクのことですか。

投資は不確実な未来に向けて賭けることですが、この賭けのもとでは、当然のことながら、ある利益が期待されています。この期待は予定ともいえるのですが、これも当然のことながら、賭けなのですから、予定は狂う、即ち、上にも下にも、期待は裏切られ得ると想定されています。期待が上下に振れる幅は、なぜか片仮名で、リスクと呼ばれています。

投資成果が想定されたリスク、即ち、振幅としての面の範囲内であれば、実は、予定通りということになりますから、予定は狂わないのです。実際、人は、投資で損失を被れば、心理的には打撃を受けるにしても、実は、損失の発生は最初から想定されていることなので、理性的には、当然のこととして、受け入れているはずです。

これに対して、期待を目標とすれば、期待を実現できないことは、投資の失敗になってしまいます。しかし、投資の場合には、普通の行動予定とは異なって、本質的に賭けなのですから、多少は上手に賭けるということがあり得ても、自助努力によって成果を左右できないのであって、失敗はあり得ないのです。投資の成果は、常に、予定通り、リスクの範囲に納まるわけです。

車を買い替えるための資金で投資するとき、車を買えさえすれば、投資の失敗にならないわけですね。

投資は、実は、消費を前提にしなければ、単なる賭けとして、投機に堕すのです。金融庁は、個人の行う投資について、それを資産形成と呼び替えていますが、その背後には、投資は消費原資を形成するための金融機能であって、形成された資産は、消費されるために、取り崩されるという前提があります。そして、金融庁が想定している資産形成は、長期投資の推奨という側面もあって、老後生活における豊かな消費のための原資の形成なのです。

しかし、資産形成における消費目的は、老後の豊かな生活というほどに遠い先でなくとも、少なくとも数年の時間の余裕があれば、中期的に設定可能です。例えば、数年後に、新車に買い替えようと思って、手元に300万円を残していたところ、何かの気まぐれが生じて、その資金を流用して、投資を始めたとしても、特に異常なことではありません。

このとき、600万円になって儲けたとか、150万円になって損したとかいうのは、お金とお金の比較ですから、投機の話です。投資が資産形成なのならば、買える車の種類に大きな幅ができたというだけであって、150万円でも買える車はあるのですから、投資に失敗はないのです。そして、投資対象のリスクの大きさについては、買える車の種類の幅の広さとして、簡単に理解されます。投資対象のリスクが大きくなるほど、より高級な車に化ける可能性が生じるにしても、最悪の場合に買える車の質は、より低下するわけです。

資産形成は、消費の繰り延べなので、繰り延べている間に、様々に事情が変化するわけですね。

資産形成は、計画的に、あるいは意図的に、消費を繰り延べて、その間に投資収益を発生させて、より豊かに消費することです。しかし、投資は確実に収益を生むわけではないので、投資成果に応じて消費計画を見直すことにもなります。そして、消費計画を見直せば、投資計画を見直すことにもなりますから、消費計画と投資計画は、生きている期間中、常に動態的に変化し続けるはずであって、この永続する変化こそ、長期投資の真の意味なのです。

実際、車を買い替えるための資金で投資をするとき、多くの人は、より高級な車を買えるようになったとしても、今と同等の車を買い、残余資金を用いて、別の目的に消費するか、あるいは、投資を継続するでしょうし、より低級な車しか買えない結果になったとしても、別

の財源を工夫して、今と同等の車を買うでしょう。誰も、投資の結果に拘束にされて、消費したりはしないのです。

資産形成は、ローンの利用と同じく、消費財源の工夫なのですか。

住宅ローンを始め、各種のローンは、先に消費して、後で返済するものですが、資産形成は、先に投資して、後で消費するものです。ローンの場合には、先に消費しているので、後で消費計画が変化することはなく、返済する金額が変動することもありませんが、資産形成の場合には、将来において消費可能な金額は不確実に変動し、それに応じて、消費計画も変動していきます。そして、投資成果が不十分のときも、消費計画を変えないとすれば、資金不足を補うために、ローンを利用することもあるでしょう。実は、ローンと投資が裏表で連動することこそ、金融の本質なのです。

投資は、消費可能額だけではなく、消費意欲も変化させるでしょうか。

車が中古の軽自動車に化けることを想定して、投資する人はいないはずで、誰しも、中古の軽自動車になってしまうことを覚悟のうえで、高級外車に化けることを夢見るからこそ、投資するのです。しかし、投資を継続するうちに、本当に、高級外車が買えそうになると、かえって、車を欲しくなくなるかもしれません。夢は、見果てぬからこそ、夢だからです。また、夢は、覚めるからこそ、夢なので、中古の軽自動車になりそうになると、車の夢から覚めて、別の夢を見るかもしれません。

そもそも、車を買い替えるための資金について、投資を始めた段階で、車の購入という消費目的は、既に相対化されているのでしょう。そして、消費を繰り延べることは、消費に対する態度の保留でもあるわけで、態度を留保しているうちに、良くも悪くも投資の成果が実現してきて、それが消費の態度に影響を与えるはずですし、投資とは、企業活動や社会経済の動向に関心を振り向けることですから、そこから得られる多種多様な刺激も、消費態度の決定を左右するはずなのです。

こうして、投資の成果に応じて、主体的な意思決定のもとで、消費していけば、常に、そのときの状況に応じて、満足感のある消費が可能になるので、投資に失敗がなくなるわけです。それに対して、投資において、期待を達成すべき目標だと解すれば、理論的にいって、五割の確率で目標は達成できないのですから、そこに不満足感が生じます。投資とは、消費を繰り延べることで、消費に常に新たな意味を付与していくことなのです。

では、投資は自己実現の手段でしょうか。

人は、消費原資を得るために働き、消費のなかで自己を実現すると同時に、働くこと自体のなかでも、自己を実現しています。金融機能とは、働いて所得を得る時点と、消費する時点との間にある時間を埋めるものであって、消費を前倒すのがローン、繰り延べるのが投資という関係にあります。投資が消費目的、即ち、欲しいもの、やりたいことに働きかけ、同時に、職業、即ち、消費原資を得る手段の選択に影響を与えるとき、人は、投資の成果を主体的に受け入れることで、自己実現できるはずです。